

高機能広汎性発達障害者における歯科診療場面の特性

横田 誠

松本歯科大学 大学院歯学独立研究科 健康増進口腔科学講座
(主指導教員：小笠原 正 教授)

松本歯科大学大学院歯学独立研究科博士（歯学）学位申請論文

Characteristics of dental practice scene in the high-functioning
pervasive developmental disabilities

YOKOTA MAKOTO

*Department of Oral Health Promotion, Graduate School of Oral Medicine,
Matsumoto Dental University
(Chief Academic Advisor : Professor Ogasawara Tadashi)*The thesis submitted to the Graduate School of Oral Medicine,
Matsumoto Dental University, for the degree Ph.D. (in Dentistry)

障害者の歯科治療中の行動特性を理解することで、患者の発達に応じた行動調整を行い歯科治療中のストレスの軽減を図ることが可能となる。しかし、高機能広汎性発達障害児の歯科場面での行動特性、また歴年齢、発達年齢そして過去の歯科治療経験などとの関連については明らかになっていない。今回、高機能広汎性発達障害児の配慮すべき事項などを検討する目的で、浸潤麻酔下の歯科治療場面での行動を観察し、各場面について検討したので報告する。

高機能広汎性発達障害児16名と定型発達児40名を対象として、診療台への移乗から診療終了までの歯科治療を、「診療台に座る」、「リクライニング位に倒す」、「説明（視覚支援使用）」、「開口指示」、「口腔内診査」、「表面麻酔の塗布」、「表面麻酔奏効時間」、「浸潤麻酔」、「効果発現までの待ち時間」、「歯科処置」、「座位の変化」、「診療台から降りる」の12項目に区分し統計的に検討を行った。

「適応」の占める者の割合が定型発達児では87.5%、高機能広汎性発達障害児では6.2%となり有意な差（ $P < 0.01$ ）が認められた。高機能広汎性発達障害児では16名中2名が中断に至ったものの、残りの87.5%の者が浸潤麻酔下での歯科治療が可能となった。各診療場面における適応者の割合では、全ての場面において、高機能広汎性発達障害児と定型発達児とは有意な差（ $P < 0.01$ ）が認められた。「診療台に座る」、「開口指示」、「口腔内診査」の3場面の適応性に関与する要因は、移動運動の発達年齢が4歳6ヵ月以上であれば、適応性を示す可能性が示唆された。高機能広汎性発達障害児が適応性に最優先される診療場面は、「リクライニング位に倒す」、「説明（視覚支援使用）」、「表面麻酔の塗布」、「表面麻酔奏効時間」、「浸潤麻酔」、「効果発現までの待ち時間」、「歯科処置」、「座位への変化」の8場面であった。定型発達児と比較して同じように静止できず、やや不

適応な行動がみられるのが高機能広汎性発達障害
の特性であることが抽出されたが、診療の妨げに

は至らないことから地域での高機能広汎性発達障
害児の歯科治療は可能であることが示唆された。